

RVR 800mまでは30~60mきざみ、800m以上は100mきざみというのが当面の目標であるが、低いRVRの値のときのきざみを細かくとるためには基線長***を短かくすることや、投光するパルスの出力****アップなどが必要である。

全天候着陸の 카테고리Ⅲ段階になれば、RVRの10分くらいの短時間予報が要望されることになるであろう。このような現象は微小規模であるから、中・小規模予報である着陸予報よりはさらに困難であろうが、現象の本質を正確に把握することができれば対応策は見出せるのではないかと考えられている。

風の鉛直シアー、言い換えれば上層の風と下層風とのベクトル差は、地表面に近い大気の下層ではいつも存在しているがふつうはそれほど問題にはならない。しかし大きな鉛直シアーの存在する場合には、進入着陸に困難することがある。着陸の際の航空機事故のうちには、大きな鉛直シアーが最終進入路であるグライドパス周辺の高度数十mの範囲に存在しそれが大きく関与したと思われるものがあり、この鉛直シアーを定常的に観測する測

器の開発を奨励したり、あるていど以上の鉛直シアーの存在を確認できた場合それを着陸するために進入中のパイロットにどのようにして伝達すべきかなどということが国際的に議論されているのが現状である。

低層の鉛直シアーが航空機の着離にどのように影響するかは、航空機の応答（レスポンス）の問題であって機種によっても飛行姿勢によってもまた操縦の仕方によっても異なり、簡単ではない。

大きな鉛直シアーは他の悪天現象と共存して発現することが多く、その影響は、たとえば悪視程や乱気流を伴う場合に特に大きくなる。従来は、他の悪天現象の影響だけが強調され鉛直シアーの影響は過小に評価されて見逃されることが多かった。

航空機の発達、空の交通ラッシュに伴って、少々の悪天でも着陸を強行するような傾向が世界的にある。鉛直シアーが関与したと思われる進入着陸時の航空機事故が報告されるようになったので、その影響が最近とくに強調されるようになった。

気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所
WMOシンポジウム「成層圏成分の変化に関する地球物理量の状勢とその影響」	昭和53年9月26日~30日	WMO	トロント（ヨーク大学）
月例会「高層気象」	昭和53年9月28日	日本気象学会	気象庁
第15回自然災害科学総合シンポジウム	昭和53年10月20日~21日		九州大学記念講堂
気象衛星データの学術利用に関するシンポジウム	昭和53年11月3日~5日		気象庁 学士会館分館
昭和53年度日本気象学会秋季大会	昭和53年11月14日~16日	日本気象学会	宮城県民会館
第25回風に関するシンポジウム	昭和53年11月28日		東京大学宇宙航空研究所 本館講堂
第1回南極気水圏シンポジウム	昭和53年12月5日		国立極地研究所
構造物の耐風性に関する第5回シンポジウム	昭和53年12月上旬	日本気象学会	気象庁